

大通公園を望む窓辺から

研修病院の思い出

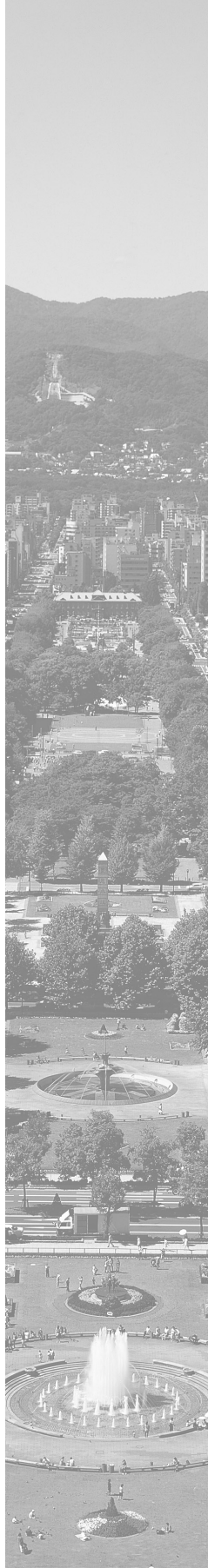
常任理事 山科 賢児

入局の半年後に決まった最初の研修先は、街中^{まちなか}に位置しながら患者数は多くなく静かに眠ったような佇まいで、療養所の雰囲気はまだ残っていた。他の同期たちの研修先は急性期の患者や検査が多い病院だったのに対し、大学の医局から研修医を受け入れたことがなく、若い医師の間で話題に上ることもない病院での研修は不安であった。

しかし実際に研修してみると、循環器や消化器に優れた指導医、電子工学の研究歴のある医師、自ら手術法や外科器具を工夫する外科医など、どの科の医師も以前は大学のスタッフであったり、留学経験があったり多士済々であった。研修医が久しぶりに勤務したので物珍しさがあったのだろう、どの医師も駆け出しの研修医を一人前の医師として扱い、知識や技術を惜しげもなく与えてくれた。

当時内科にはアメリカとオーストリアで研究と教職に就き、帰国間もない先輩医師が勤務していた。何事にも多才な先輩の温厚な人柄や豊かな知性に触発されたからこそ、医師としての今の自分があるといっても過言ではない。「生体は細胞・組織・器官などのサブシステムからなる階層構造を持つ大規模なシステムである。その維持には免疫・神経・ホルモンなどの情報による制御が行われ定常状態を保っている。」「癌は細胞社会の統合戦略を無視する細胞群である。」などの生物の適応戦略の概念をマンツーマンで講義してもらった。

生体をシステムと捉える考え方は、その後の基礎の教室や留学先で行った癌の転移の免疫学・細胞生物学的な研究の大きなヒントとなり、また症状や疾患をストレスと生体の反応の現われと診る内科・心療内科医として無くてはならない柱となっている。スケールの大きな一人の医師との出会いが駆け出しの医師の生き方と働き方を決定づけた。不安で始まった研修病院での思い出は今も大切な宝物である。



赤とんぼ

常任理事 岡部 實裕

残暑を追い抜くように秋の気配が感じられる日々となった。朝の散歩に家を出ると、赤とんぼが一匹、庭の花に止まっていた。子どもの頃見惚れた秋空を彩るとんぼの連隊飛行の情景が浮かんだ。とんぼは子どもたちの「人気者」で、とりわけ、赤とんぼは人気があった。草花に止まっているとんぼの後ろからそっと羽を押さえ、糸でつなぎ「自家製の飛行機」になってもらった。とんぼは、逆飛行はせず直線飛行あるのみ。一緒に走ったりして、ひと時を戯れては、秋空に戻してやったものだった。

とんぼは前へ、前へと直線飛行し退かないところから「不転退」精神を喩えた「勝ち虫」として武士にも喜ばれ、陣羽織、武具などの装飾に用いられたといわれているらしい。戦道具に利用されて可哀想なものだ。よく生き延びてきたものだ。だが、なぜ、長い進化過程で転退する能力を得ることができなかったのだろうか？ 最近読んだ人工知能研究の世界的権威レイ・カーツワイル氏との対談編(吉成真由美氏)をふっと思い出した。その中で彼は述べている。いろいろと議論の多いところであるが「人間の直観的思考は1、2、3、というふうに直線的な線形思考で、情報技術の指数関数的成長の力(1、2、4、8、と倍々)を理解しなければならない。人類は将来、GNRと合体することにより新しい存在に進化していく」ということのようなのだ。いずれにしても、直線的な「線型思考」の枠組みから複眼の目を養うことを、今の時代は求めているということなのだろうが、日本には「ひとつを聞いて二つを知れ」という古くからの諺がある。この積み重ねこそが「指数関数的成長」の力となるのではないだろうか。

四季の移ろいを直感しながらの散歩を終えて家へ戻ると、まったく偶然だが、床の間の「立葵紫陽花に蜻蛉図」から「稲穂と雀」への掛軸かけ替えが待ち受けていた。AIにはこういう色彩感のある「感情的思考」ができるようになるものかと、とんぼさんに少々の休暇を与えることとした。